

卷 頭 言

三春花開きて、華を稱する暇無く、亦華を知るの術を解せざるうちに、忽忙として暮れ去りぬ。

鮮芽緑彩日を逐ふて伸び匂を俟たずして色を増す。蛙鳴畫夜乾坤にひよきて、不寒不熱の候惠をつぐれども、人生の塵垢深うして、泥洹の靈發おほく望みがたし。時々流れ、刻々うつり、無常はやく世間を燃き、三有の動亂いよくほげし。雨期に世尊の在世を偲び、安居の報を耳にすれども、星霜幾千佛陀無くして過ぐ、邪慧狂亂人我自覆して近づきがたし。無佛惡世の導師法然房源空上人、此の昏蒙の闇を開きて、彼の智慧眼を點じたまひしよりこのかた、七百有五十星霜に垂んとす。鬪諍堅固の澆季口に萬邦の平和を高唱すれども、邪家の前途洵に寒心に堪へず。惡潮滔々、邪瀾轉廻し、人心歸趨を失ひて、牢固たる前程を望み得ず。本具の惡貪斯の時に於て徒らに燃んにして、人稱して以て文化と爲すも雖へども、輕佻浮薄眞に救ひ難しと云ふべし。吁三千の教主、呼べども還らず。本師源空上人の遺韻叩けども揚らず。群義續生、各々正と稱し、以て世に投すべしと爲す。道俗之が爲め迷ひ、眞實甚だ甄ち難し。迂空泣血合掌、偏に上人の應現を請ひて斯の惡世の邪網を開かむことを希ふ。

深綠陰闊く、一聲血に泣きて乾坤に投するもの豈獨り杜鵑のみとせむや。

嗚呼南無の法是れ吾が全身にして全心、亦復全聲なり、赫日地を照らせば、萬物漸く生の惱みを重うすれども、翠溪に清泉を掬び、綠陰深き所、幽かに落ち來る蟬聲に耳傾くれば、もわけはてたる、そのもわけはてたる聲のすよしぞ。

永へに御名清涼の音に和すべし、快い哉(指空)